

## 第2回 仙台市総合計画審議会起草委員会議事概要

この議事概要は、事務局の責任においてとりまとめた速報であり、事後に修正する可能性があります。なお、正式な議事録については、別途ホームページに掲載しますので、そちらをご覧ください。

日 時 平成22年1月27日(水) 10:00～12:00  
会 場 仙台市役所2階 第四委員会室  
出席委員 大滝精一委員長、江成敬次郎委員、小野田泰明委員、小松洋吉委員、西大立目祥子委員、間庭洋委員、柳井雅也委員 [7名]  
欠席委員 庭野賀津子委員 [1名]  
仙 台 市 企画市民局次長、総合政策部長、総合計画課長、総合計画課主幹(1)  
次 第 1 開会  
2 議事  
(1) 現行基本構想の総括について  
(2) 新基本構想の策定方針について  
(3) その他  
3 閉会  
配付資料 資料1 現行基本構想の検証について  
資料2 現行基本構想の検証資料  
資料3 現行基本構想の都市像概念図  
資料4 共につくる未来の仙台(仙台市政だより平成22年1月号抜粋)

### 会議の概要

開会

議事

#### (1) 現行基本構想の総括について

・事務局から資料1、資料2及び資料3を基に説明し、その後、委員での意見交換を行った。

<主な意見等>

・資料1の最後にある縦軸と横軸というのはどういう意味合いか確認したい。

現行の4つの都市像の大きな組み立て方については現状どおりでいいのではないかという前提に立ったときに、その政策体系でとらえ切れない課題等については、基本計画レベルで横軸のパッケージとして政策的に示したほうが、行政が何をすべきかということも含めて明確になるのではないかと考えた。これについては、起草委員会において、そもそも都市像自体をどうしていくべきかという議論をしていただいた後に、横軸の問題をご議論いただきたいと考えている。

・縦軸が4つの都市像として基本構想の中でうたわれ、都市像を横断するようなテーマについては基本計画の中で実際の政策的な課題として横断的に取り組んでいくというイメージか。

イメージはそのとおりであるが、例示しているテーマは、事務局の総括作業の中で議論が出されたものを提示しているにすぎないことはご留意いただきたい。

- ・我々の目標というのは、主人公である仙台市民が、どういう都市構造の中であれば機動的に動けるかを示すことにある。そのため、都市構造のあり方を幾つかのキーワードできちんと示しておく必要がある。重要なのは、構造がフレキシブルであるということ、距離が短いということ、機動的に動かせるということである。
- ・距離が短くというのは、いわゆる時間距離や相対距離について、交通機関を活用して時間を短くしていくことである。例えば産業の場合、これまでは地理的にどこでその産業を育成していくかという議論があいまいで、基本計画などにおいて議論されていたが、基本構想の中でも考えていくべき。
- ・4つの柱の中にある中枢都市の機能と学都の知的資源は、産業という切り口では両方にかかわる。例えば知的な資源については、実際応用技術や様々なノウハウが地域に移転されていくプロセスも含んでいるが、こういったものがどこに入るのか分かりづらいところがあるので、横串のところに付加的に説明し、内容を豊かにすれば、距離の問題などがうまく説明できると思う。
- ・産業を例に説明したが、本日はキーワードとその重なりぐあいについて議論を詰めていくべきではないか。
- ・高齢者についての現状認識は昔よりもずいぶん進んでいる。例えば、買い物に行けない高齢者が多数出てきているといった状況は10年間で問題意識が随分変わってきている。そういった高齢者の問題を深掘りしたような考え方をこの基本構想の中でとりあげてもいいのではないか。
- ・10年前と比べて、テーマの相互関連性が非常に深まってきているという印象が強まっている。都市像の中身を議論していくときに、「市民」という目線が横串的にあると、持続可能性や都市構造といった問題も全部通るような感じがする。そういったもので4つの柱を繋いでいくことなどもイメージとして湧いてくる。
- ・東北との間柄で、いかにリードしたり、あるいはサポートしたりしていくかというお互いの協働の関係は、横串的な視点として、4つの柱に共通すると考えられる。
- ・環境の部分では循環型から持続可能という方に軸足を置くのは良いと思う。現在、環境審議会において環境基本計画策定で論議されているのは、低炭素化をどうやって実現していくかということで、ローカルの問題で一番大きいのは、車による排出である。その意味で東西線の問題だとか総合交通体系、都市構造の問題などが当然クローズアップされてくる。また、従来、循環型として終末処理的なものが中心になっていたが、これからは入り口のところ、プロセスのところも対策を講じていかねばならないと議論されていたことから、持続可能な都市づくりという考え方への移行は非常によいと考える。
- ・市民といったときにいろんな担い手、プレーヤーがたくさんあるということと、その人たちが力を合わせるということを明確にしていくという説明はいいと思う。
- ・都市像については、伝統的に仙台の中で4つ、こういう都市にしたいということで長く使われてきたものだと思うが、ゼロ成長時代など、戦後の日本では経験したことのないようなことがやってくるこれからの10年、20年という重たい屋根が、この4つの柱だ

けで支えられるのか、ということが心配である。市民活動という仙台ならではのものを、経験したことのない時代を生きるための補強の柱として入れてもいいという気がする。新しい時代のための新しい総合計画であるにもかかわらず、4つ柱があってその下に実施計画までぶら下がってくるという、基本的なところが変わらないということには違和感があるので、もう少し検討の余地があると思う。

- ・ こういう基本構想を考えていくときというのは、与えられた所与の条件をプリミティブに受け継ぎ、改良とか改造を加えてやっていくというやり方と、新しい条件を追加していくというやり方があると思う。この4分類というのは金科玉条のように動かさないほうがいいのかどうかという議論は、本当の意味では行っていない。もしこれを変えてしまうと、様々な問題が出てくるというのであれば動かさないほうがいいが、変えても問題ない、むしろ組織が柔軟に変身していけるのであれば、見直したほうがいいと思う。  
都市像については、内部でもかなり議論はあったが、出発点として仙台の歴史的な位置というものを考えたときに、現行の基本構想の理念、都市像の方向性というものが、我々にとって動かしがたい大きな存在であることは否定できず、ある程度これを前提に議論が進んできたところがある。ただ最終的な判断は、審議会にゆだねられている部分でもあるので、審議会の議論は十分尊重しなくてはならないと考えている。
- ・ 4つの柱のベースに当たる部分として、仙台市民像というのをもっと強く打ち出していくべき。その上でその4分類はどう乗っかってくるかという議論をしておく必要がある。
- ・ 急激な国際化というのも大きなキーワードのひとつ。そこへの対応の中で、仙台の拠点性を東北の中でどう位置づけていくのかといった議論をしっかりと行い、どこかに入れておくべきであり、場合によってはこれを柱のひとつに加えたほうがいいと思う。
- ・ 現行基本構想の都市像の最初に「市民主体の創造的な都市づくりを基調に据え」という表現が出てくる。要するに、「市民主体の創造的な都市づくり」がベースにあって、4つの都市像が出てくるという話をしているわけだが、そのところが全体として上滑りしている感じがある。そもそも市民主体の都市づくりとは何だというような話自体が余りきちんと議論されておらず、創造的なということの意味が何だということも余り議論されずに、言葉がずっと出てくるということなので、ここの議論はきちんと深めるべきだろう。仙台の市民像や、あるいは市民の創造性とか市民活動のイニシアチブを都市づくりそのもののベースに置く、という議論を前面に出していくとすれば、このあたりについていろいろ意見を出し合って深めていく必要があると思う。
- ・ 人間の脳の中で描いた理想の空間的な現象形態が都市であり、これが一致するというプロセスを限りなくやっていくということが都市づくりに当たる。したがって、市民というものをきちんと定義づけすれば、都市がどうあるべきかというあるべき論も出てくるはず。現行基本構想はクローズドなきれいな世界と理解しているが、もう少しオープンな世界との関係というのが、今度の基本構想の考え方になっていくだろうと思っていた。だから、市民像をより明確にするというのが大事である。
- ・ 仙台の持っている中枢性についてどのように考えていくかという論点は非常に重要だと思うが、それを地球とか世界都市といった言い方にして良いかは議論が必要。例えば50年後の人口は77、8万人くらいと予測されており、その中で世界都市性という話になっ

てくると、よほどの何かがないと言葉に負けてしまうので、表現だけではなくて、内実を伴うようなものとするについて議論があっている。

- ・都市像の4つというのは残したらいいのではないかな。ただその上のほうに、21世紀の仙台の市民像といったものを、4つの都市像とリンクしたような表現で今回の計画に入れられれば良い。高齢者云々については、そこまで踏み込めればなお良いと思うが、高齢者関係の計画は別途あるので、どこまで今回の計画に盛り込むべきか検討が必要。
- ・4つの都市像に加えて何か別の柱が必要なのではないかなといったニュアンスの議論として聞いたが、要はその4つの柱の土台についての議論なのではないかな。4つの柱で10年間やってきて、その柱を延ばすだけではなかなかうまく進まないのだから、その共通の土台、土俵を育成していくことも必要だということが分かってきたのだと思う。その1本を柱にするかどうかということ、ほかの4つの柱と比べると、やはり共通の土台かなと思う。
- ・4つの都市像に何がぶら下がっているのか確認していくと、最初の4つはいいが、最後まで行くと縦割りを是認しているように思え、ここでかなり濃い議論をしたことが余り反映されていないと感じた。むしろ、この4つで分けている構造に問題があると仮定したら、何が代案として考えられるのだろうかとかと仮想した。
- ・現基本構想の丸数字まではいわゆる憲法みたいなものだが、厳しい21世紀において市民から求められているのは憲法ではなく、アクションプランのようなものであると仮定すると頭を切りかえる必要があると思う。
- ・ここでずっと中核を占めてきた議論は、ひとつは仙台型市民参加社会の実現であって、その主体は、行政単独ではなくコミュニティビジネスであり、エンフォースメントされたNPOであり、今までの行政という組織の外形を揺り動かすようなことをきちんとやらなければいけないというもの。その鏡の裏側として、自律できる地域クラスターという考えがあり、子育てや高齢者の生きがい発揮、教育といったことについて、地域から発想するような視点というのがあるべきだと。仙台は都心と郊外が非常に近い関係にあるため、地域の自立のあり方というのは非常に考えやすい。地域側から見たときの自律できる地域クラスターというのは、行政組織の内部構造がお互いつながってこないと実現しにくい。そこで、組織の内部構造が壊されるべきもの、もしくは障害となる対象と位置づけられると思う。もし4本柱以外であればこれが前面に出てくると考えられる。
- ・もうひとつは、仙台には広瀬川、定禅寺通り、青葉山、さらには魅力ある都心部があり、都心部というところの象徴するのはそういうところだと思う。特に、圧倒的に魅力ある都心部と、川の中流域にある日本の中では非常に珍しい県庁所在地なので、それを生かして、どうやって21世紀に生きていくかという柱を立てなければいけない。
- ・学都とは何かということについては、ひとつはコミュニティビジネスとか自律できるクラスターというのが出てくると、そういうところに定着できるような人がかなり増えてくるという話や、自然の領域についても、同じように定着する人も出てくると。それ以外に、ここを中心にいろんなところに出かけていく、東京に出かけていったり東北に出かけていったり。東北全体が疲弊している原因のひとつとして人材が非常に少ないことが問題なので、仙台の役割は大きい。ここで問題になるのは、仙台市という行政の枠組みを語る場で、東北の話までして良いかという領域の制度的な縛りとの闘いにな

る。それ以外にも物理的なスケールをどう横断するかという話も出てくる。先ほどの東北のシンクタンクであり世界のシンクタンクであり、新しい産業を創出していくという話は、知識、産業、マネーという領域ともかかわってくる。

- ・問題の鍵となるのは、行政だけではなくてNPOとか地域ビジネスとか、そういう枠をどう越えてやっていくかということを示さなければならないことである。例えば自律できる地域クラスターをやろうと思えば、縦割りをやわらかくしなければならないが、一歩間違えるとただ混乱させるだけとなる。国の制度が基本になっているので、書いたからといってそんな簡単にはできることではなく、行政が書く危険性もあるが掲げておくのは悪くない。
- ・現行基本構想の都市像の1つ目は、安全で安心な市民生活が健やかに送れるような基盤を形成していきたいというインフラ的な要素が柱になっているが、今までの議論では、市民のとらえ方がそれだけでは足りず、文化や人のつながり、働くことなど、市民生活の多様性の部分が中心となっており、それらが1本目の柱にはおさまらないという印象がある。
- ・4つの都市像は大変うまく表現されており、現時的にこれを全部変えろというわけにはいかない。しかし、4つを生かしながらも、できれば市民参加社会の実現とか自ら考えて自ら行動し自らつくっていく、というところは全面に出せればいいのではないか。
- ・安全、安心というのはそのとおりだが、楽しいとか生きがいあるとか自分らしくとかというのどこかに入れるべき。
- ・共生社会というのは非常にいいが、あいまいな表現であって、むしろ市民が希望を持てるような、希望社会と言ったほうが良いのでは。
- ・現行基本構想は、受け皿づくりとそういった仕組みづくりというのが論点としてあると思うが、我々がもしもここで新基軸を打ち出そうとするならば、主語を明確にすることだ。市民が何をやるのか、それに対して市はどういうことを考えていくのかといったことは、主語が明確でないと分からない。
- ・現行基本構想における「1 策定の趣旨」、「2 都市像」、「3 施策の基本構想」、「4 基本構想の推進」という構造については、前の総合計画から踏襲してきているのか、あるいはこのときに変わって出てきたものなのか。

中身はともかく、基本的な構造自体はほぼ同じだと思う。

- ・これまでの10年とこれからの10年を考えた場合、おそらくこれからの10年の変化の方が大きく、経験のないことがやってくると考えられ、基本構想と基本計画の分け方、あるいはこの4つの構造も、全部見直して良いと思う。都市像についても同様。4つの都市像の下に施策がぶら下がってくことを考えると、これを見直さなければ市役所もこれまでどおりの組織の形態でやっていくことになると思うが、市民も変わらなければいけない時代なので、市役所にも変わってもらいたい。

事務局による基本構想の検証では、現行基本構想の都市像も21世紀中葉を意識した都市像になっており、21世紀中葉をという前提では基本的なありようというのは否定されるものではないだろうということから出発していた。そういう意味では、内部の議論の前提が、ここで議論いただいていることとは少し違っているというのはあろう

かと思う。もし新しい基本構想の目指す先が、例えば10年でよいということであれば、また違う議論になろうかと思う。

- ・都市ビジョンの柱も4つとなっているが、21プランとは別で、創造、交流、機能集約型都市、杜の都となっており、外にどんどん打って出ていくぞという項目を新たに増やしている。良い悪いは別にして、そこに明確な姿勢が読み取れる。今回、4つの区分に10年前と同じことは込められないから、その中身が何なのかということが問われている。都市像の4つの分け方について、何か積極的な考え方が要るのではないか。
- ・やわらかくこの4つの都市像の枠組みを踏襲するのはいいと思うが、その中身について、踏み込んだ書きぶりがいると思う。この4つ健康、杜、中枢、学都という分け方では、先ほどの自律できる地域クラスターや、市民型社会の話などで、健康が膨らんでしまう。例えば健康のほうを2つに増やして、中枢と学都はひとつにまとめるとかいったことをしてもいいのではないか。

## (2) 新基本計画の策定方針について

- ・委員長がこれまでの起草委員会の議論の総括を行い、審議会への報告内容を確認した。

### <主な意見>

- ・都市像については今後とも議論をしていくべきだと思うが、共通認識としては、この4つの都市像自体に意味がなくなっているということではなくて、少なくとも柱の大事な部分を構成しているとは言えると思う。また仙台の市民像や、市民の創造的な取組とかというようなことについてしっかりとした記述があったほうが良いのではないか、という議論があったと思う。そのあたりは論点の整理をするべきだが、審議会にはこういう議論が起草委員会の中で行われているという報告でいいと思う。
- ・どの辺を強く意識して基本構想をとらえたらいいかというのは、委員の一人一人の受けとめ方がかなり違うと思うが、審議会から与えられている命題はあくまでも21世紀中葉のところでどういう構想を持っていきたいかということにある。そうなるという言葉の抽象性などいろいろなものを含んでしまい、どうやって戦略的に取り組むかというようなことについては、トーンが弱まってしまうということが必然的に起こってくると思うが、折り合いをつけなければならない。
- ・現行の構想では、策定の趣旨、都市像、施策の基本方向、基本構想の推進という4部構成になっている。これまで構成自体については議論がなかったが、基本的にこれをベースにして進めていくということによろしいか。

(了承)

- ・資料1についての事務局からの原案では、1の策定の趣旨についてはこの10年の変化というものを見た上で、策定当時の時代認識と現在の時代認識の変化に合わせて幾つか見直していく必要があるという指摘があった。例えば格差の問題、環境問題に対する認識の深まり、あるいは成熟社会における成長エンジンの考え方、あるいは社会資本の整備というのも新規から維持管理に力点を移していくことなど、軸足を移す部分についてはきちんと策定の趣旨に書き込んでいくということによろしいか。

(了承)

- ・ 2の都市像については、幾つかの議論があったということを次の審議会で報告をするにとどめておいたほうがいい。4つの柱自体はそれなりの意味とか基本構想としての重要性を持っているが、それで十分かということについては様々な議論があった。ひとつは仙台市民像とか市民性とか、市民の持っているイニシアチブとか主体性、あるいはだれが市民なのかということ、あるいは主体の役割のようなものについてもっと踏み込んだ都市像というものを書き込む必要があるのではないかというような指摘があった。また、既存の4つの枠組みだけで議論するということが、現実的には特に縦割り構造のようなものを温存してしまう危険性があることから、既存の組織の壁を横断して協働するために何が必要かという視点で都市像を書き込むべきといった指摘があった。さらに、市民についての様々な記述を4つの都市像のひとつに押し込めるというようなやり方は必ずしも適切ではないというような意見もあった。このように、様々な意見があったと思うので、そのことを審議会で報告するにとどめていくことでよろしいか。
- ・ 審議会への報告について、確かに結論は出ていないが、かなり深い議論はされているわけなので、10年前、藤井市長のときの分け方、梅原市長のときの分け方、今までの議論でたくさん出てきたキーワードについて整理するといいいのではないか。
- ・ では、キーワードの選び方や、どのようなやり方で報告したら良いかということについては、事務局と相談した上で整理していきたい。
- ・ 3番目の施策の基本方向と最後の基本構想の推進というところについては、この都市像がどうなるかということによって中身が変わってきてしまうということが当然あるので、どのように整理したらいいかということについては、議論しにくいと思う。
- ・ 横断的な主要プロジェクトのことについても、もう少し起草委員会の中で議論を深めていくということにしたいと思う。
- ・ 施策の基本方向という具体論になればなるほど、相互関連性が非常に高くなってくるわけなので、4つの都市像ごとに別々に体系化されるというきれいな関係になるのではなく、横串といったことが議論になっていることは審議会で報告すべき。
- ・ 資料1の4の基本構想の推進というところで、市民主体の都市経営をより充実していくといった提案があったと思うが、趣旨については問題ないと思うが、都市像の柱の立て方によって変わってくるので、どの場所にどのような表現で入れ込むかということについては、検討していくこととしたい。
- ・ 今後、次の審議会でどのような整理の仕方をしていったらいいかということについては事務局と相談し、時間があれば皆さんにも少し見ていただくことになるかと思うが、基本的には審議会に対する報告の仕方については委員長に一任していただきたい。

(了承)

### (3) その他

- ・ 事務局より資料4を説明。
- ・ 事務局より今後のスケジュールについて説明。